

市立

いちかわ

自然博物館だより

令和3年(2021年)

6-7月号

(通巻 194号)

2021年度

あたりまえの風景に
あたりまえの生き物に
あたらしいときめきがある！



自然博物館収蔵写真

コオイムシ

卵を背負うので「子負い虫」です。背負うのはオスの役目です。長田谷津では、安定して生息しています。

P1 ☀️ いきもの写真館
コオイムシ

P2 ☀️ 市川市内の絶滅危惧種
— 鳥類 —
/ 4

P5 ☀️ いちかわの植物 30年
クララ
ミヤコグサ

P6 ☀️ くすのきのあるバス通りから
おたまのお世話をしています

P6 ☀️ 展示室 飼育生物の話題
オオムラサキ

P7 ☀️ わたしの観察ノート
3~4月の記録

P8 ☀️ ご案内

博物館だよりはカラー版をホームページでご覧いただけます。

市川市内の絶滅危惧種

－鳥類－

レッドリストは、絶滅のおそれのある野生生物をリストアップしたものです。新しく環境省より「環境省レッドリスト 2020」が公表されていますので、そのリストから市川市域に生育・生息する種類を抽出してご紹介します。第2回は鳥類です。

(絶滅危惧の度合いの表記は、ローマ数字を算用数字に置き換えています)

市川市域のような狭い地域で鳥類の絶滅危惧種を取り上げる場合、鳥の生活圏の広さに注意が必要です。スズメやシジュウカラといった身近な鳥でさえ、市川市域よりも広い範囲で行動します。渡り鳥になると、日本列島という範囲に収まらず、国を越え大陸間を移動して生活します。市川市域を利用するのが限られた日数である場合も多いので、それを市川市内の絶滅危惧種と呼んでいいのか難しい面があります。

鳥類保護の取り組みには、大きく2つの形があります。ひとつは、繁殖を守る取り組みです。この場合は対象となる種類を特定し、繁殖が成功するように人が手助けをします。ライチョウやアホウドリ、コウノトリ、トキなどがその例です。

もうひとつが、鳥類が利用する場所を守る取り組みです。特定の種類ではなく、場所を守ることで絶滅危惧種も普通種も分け隔てなく保全しようという考え方です。水鳥が利用する湿地を保全する国際的な取り組み「ラムサール条約」は、この考え方に基づいています。

鳥類の生活圏よりも狭い市川市域で絶滅危惧種を紹介するにあたっては、市内に残る自然環境をタイプ別に分け、そこを利用している、あるいは利用する可能性があ

る種類を紹介します。前回取り上げた魚類のスナヤツメやホトケドジョウとは場所とのかかわりの深さが異なるので、扱い方も変えています。

湾岸地域の水辺

市内の湾岸地域には、自然に近い状態の浅瀬、干潟、湿地、ヨシ原があります。江戸川放水路や行徳近郊緑地特別保全地区、三番瀬と呼ばれる東浜地区や塩浜地区の沖合、江戸川の海寄りなどです。そこを利用していたり、利用する可能性がある絶滅危惧種の鳥類にはつぎのようなものがあります。

絶滅危惧1A類

ヘラシギ、カラフトアオアシシギ

絶滅危惧1B類

クロツラヘラサギ、チュウヒ

絶滅危惧2類

シロチドリ、セイタカシギ、オオソリハシシギ、ホウロクシギ、ズグロカモメ、コアジサシ、ハヤブサ

準絶滅危惧

カラシラサギ、ハマシギ、オオセグロカモメ、ミサゴ

情報不足

ヘラサギ



クロツラヘラサギ（撮影は沖縄県）

内陸の水辺

市内の内陸部には大小の調節池、調整池、水辺がある公園・緑地があります。環境は場所によって異なりますが、自然に近い状態の湿地やヨシ原、池もあります。水田が無くなった市川市域では数少ない内陸の水辺です。そこを利用していたり、利用する可能性がある絶滅危惧種の鳥類にはつぎのようなものがあります。

絶滅危惧2類

トモエガモ、ツルシギ、タカブシギ、アカアシシギ、タマシギ、ツバメチドリ

準絶滅危惧

チュウサギ、ヨシゴイ、ヒクイナ、オオジシギ

情報不足

ケリ

内陸の水辺は、管理のしかたによって環境が大きく変わります。大きな調節池を全面ヨシ原にすれば、たとえばチュウヒが越冬し、ヨシゴイが繁殖し、オオジシギが飛来するかもしれません。しかし、全面をヨシ原にすることで生育・生息の機会を失う

動植物も多くいます。治水機能はどうか、地域にふさわしい環境なのか、という点の検討も必要です。ここでは、そこまで踏み込まずに単に種類を列挙しました。

また、チュウヒは飛来の実績がある湾岸地域で扱い、逆に湾岸で扱ったシギ類がこちらに飛来する場合があります。



ヨシゴイ（撮影は印西市）

林、谷津

市川市域の南部は低地なので、林は北部にあります。多くが谷津や谷の斜面林です。したがって、どこまでも広がる平らな林ではなく、水辺とセットになった環境です。長田谷津（大町公園内の自然観察園）がその典型です。谷底の環境こそ都市化したものの、じゅん菜池緑地も同様です。

市川市域の林を利用していたり、利用する可能性がある絶滅危惧種の鳥類にはつぎのようなものがあります。

絶滅危惧2類

ミゾゴイ、サシバ、サンショウクイ

準絶滅危惧

ヨタカ、オオタカ、ハイタカ、ハチクマ

情報不足

オシドリ、オオムシクイ



ミソゴイ（長田谷津 自動撮影）

繁殖している(していた)種類

鳥類が市川市域をどう使うかは、大きく繁殖、越冬、通過（立ち寄り）の3つがあります。どれも大切ですが、とりわけ繁殖は、その種の存続に直結します。繁殖という観点で環境省レッドリストから抽出した種類を挙げてみると、つぎのようになります（繁殖の有無は「市川市鳥類目録1986年～1991年」および博物館の観察記録による）。

絶滅危惧2類

シロチドリ、セイタカシギ、コアジサシ、タマシギ

準絶滅危惧

ヨシゴイ、ヒクイナ、オオタカ

繁殖については、繁殖阻害の恐れから積極的に調査を行うべきものではなく、安定的で明らかな事例、あるいは一部の人が観

察した事例などに基づいています。それでも、市川市域を繁殖地として利用する可能性がある種類の多くが、実際に繁殖していました。時代をさかのぼれば、チュウサギやサシバも繁殖していたかもしれません。



コアジサシ（江戸川放水路）

取り上げなかった種類

例えば絶滅危惧2類のヒシクイ、準絶滅危惧のマガンなどは百年近く前は行徳地区の干潟に群れで飛来していました。ですが、その環境が戻る可能性はなく、ここでは取り上げませんでした。絶滅危惧1A類のハクガンは偶発的な飛来と考えられること、クロコシジロウミツバメは古い記録しか無いことから、やはり取り上げませんでした。このような考え方で取り上げなかった種類が少なからずあります。

「環境省レッドリスト2020」からの抽出手順

- ①. 基本的な手順は前号で紹介した通り
- ②. ただし、「市川市史自然編」鳥類目録の種名には日本鳥類学会の目録の番号が[]で示されているので、エクセルの置換機能を使い、置換前の文字列を[***]、置換後に何も指定せず置換を実行する。[]付き数字が削除され、種名だけのセルにすることができる。

いちかわの植物 30年

自然博物館の30年あまりの活動で得られた写真を用いて
市川市域の植物を紹介します。

クララ、ミヤコグサ

クララとミヤコグサには、谷を埋め立てた場所で見えました。いずれも開けた明るい場所が好きで、環境的にはピッタリでした。ミヤコグサは山に行くとき雑草のように道端に生えているのを見ていたので、ここにもあったのか、という感じでしたが、クララは初めての出会いでした。若いころは高山植物目当てで山にあがることが多く、里地の草原を訪れることがなかったからかもしれません。

ただ、どちらともそのころ限りで、数年で消えてしまいました。今にして思えば、そこは埋め立てた場所にもかかわらず湿地性のカヤツリグサ科が生えていたり、クララやミヤコグサが生えていたり、周辺とは異質な植生でした。おそらく、埋め立てに用いた土に種子や根が混じっていたのでしょう。帰化植物のように、それをきっかけに広がっていけば地域の植生の一員ですが、数年で消えてしまったものについてどう判断するか、むずかしいところです。こういう経験があるので、発見、即植物リストに追加、ではなく、いつも「人為では？」と疑うようになってしまいました。

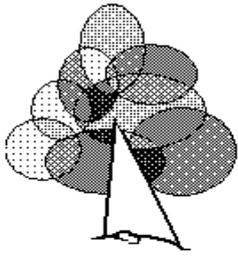
前回は書いた通り、草原的な環境は市川市域では貴重な存在です。クララの群落を残せていければ、と残念な気持ちにもなります。



クララ(1993年7月2日)
柏井町4丁目 狭い谷を埋め立てた場所に生えていた。



ミヤコグサ(1993年6月11日)
柏井町2丁目 クララを見つけたのと同じ谷だが、少し離れた場所。



おたまのお世話をしています

5月13日は、しとしと雨が降ったりやんだりでした。「自然観察園のカエルが今日上陸しますよ」と自然博の方からいわれ、すぐに池のそばの杭のあたりを見に行きました。小さな黒いカエルが草や杭の上にたくさんいました。我が家のオタマジャクシは、尻尾もあり、足もはえていません。「いろいろ条件が違うのでしょう」と。そういえば、もともといた「カイミジンコ」が増殖して、オタマジャクシに噛みついていようです。浅瀬も作ってあるし…。雨で水が増え、容器の縁の溝にオタマジャクシが挟まってい

ました。その後は天気予報で雨と聞くとさながらダムの手前放流のように水を減らしました。予測以上に雨が降り溢れた水とともに外の土の上にオタマジャクシが溜まっていた。水に浮かべると動くので、戻しました。連休中は雷雨があると聞き、園芸用のポールやビニルシートを買い込み、温室風雨除けカバーを作りました。降り始めに設置、上がると取り外します。「5月中にみんなどこかに行きますよ」と。今年は梅雨入りが早いとか、まだお世話が続くのか…。

(M. M.)

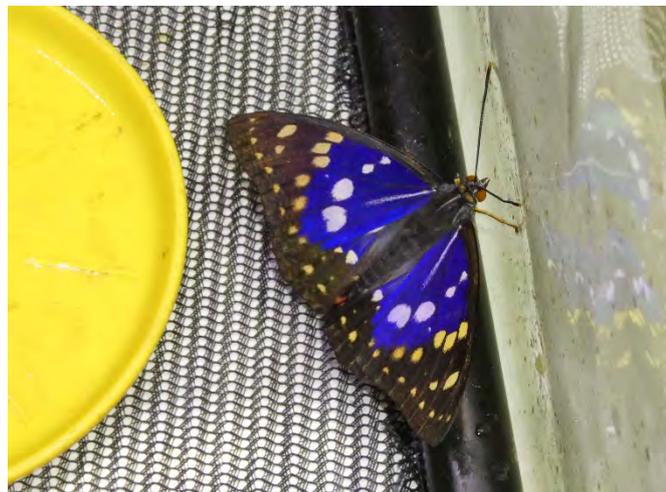
No.38

展示室 飼育生物の話題

オオムラサキ

オオムラサキを増やす取り組みをしている市民団体から、毎年、展示に使ってほしいと幼虫の提供を受けています。屋外で食草のエノキを栽培し、そこで幼虫を育てます。以前は、そのまま蛹・成虫と飼育を続けましたが、屋外で成虫を見せようとしても、ケージの上部の明るいところになってしまうので、逆光で、結果的に「黒いチョウ」にしか見えません。そこで、今年からは蛹になった時点で室内に取り込み、蛹・羽化・成虫を飼育ケース（ネット仕様のもの）で見せることにしました。やはり、室内で照明を当てて見るオオムラサキは、青が映えて美しいです。ネット仕様なので、翅が傷むこともありません。

餌は、カブトムシ用の昆虫ゼリーを水で溶いて、お皿にいます。ちゃんと飲んでくれて、そこそこの期間、飼育することができます。



わたしの 観察ノート

●堀之内貝塚より

- ・アマナが咲いていました(3/15)。モンキチョウ?がとまっているのを初めて見ました。マクロレンズから標準に変えている間に、飛んでいってしまい、写真には撮れませんでした。
- ・ホタルカズラが小さな群落を作り咲いていました(4/24)。以前より西北に移動した感じがします。スイバが蕾をつけていました。

●市内某所より

- ・いつもの所でシュンランが咲いていて、ホッとしました(3/18)。他の場所でも咲いていました。
- ・ギンランが咲いていました(4/19)。広範囲にわたって数多く咲いていたので、うれしかったです。今年は、3月の気温が高かったせいか早い感じがします。キンランは見当たりませんでした。

以上 谷口浩之さん(北国分在住)

●真間山南側斜面林より

- ・昨日の大雨がやんで晴天になりました。ウグイスの鳴き声がよくひびきます(3/14)。だいぶ上手に鳴くようになって楽しいです。
- ・ツマキチョウ(3/15)、アゲハチョウ(4/14)、ミスジチョウ(4/28)がとぶのを見ました。賑やかになりました。
- ・シオヤトンボ、アオスジアゲハがとびまわり始めました(4/18)。季節が進んでいることを感じさせられます。

以上 M.T.さん

◆国分川調節池より

- ・スミレの花がきれいだよ、とお知らせ

いただいて見に行きました(4/8)。ムラサキサギゴケの群落が広がり、アリアケスミレと種スミレも咲いていました。去年も見ましたが、全体に群落が拡大傾向でした。去年は紫花のスミレをノジスミレと判断しましたが、株数が増えた今回再確認したところ側弁の毛がはっきりしていたので、ノジスミレではなく種スミレに訂正します。

金子謙一(自然博物館)

●東浜より

- ・潮が引いて干潟にできた大きな潮だまりにウミアイサがやってきて閉じ込められた魚を食べていました(3/4)。ウミアイサがいなくなった後に潮だまりを覗いてみると、ハゼの仲間が沢山いました。
- ・夕方の三番瀬は人が少なく、渡り途中のシギ・チドリ類が干潟にたくさん降りていました(4/22)。中でもホウロクシギは体が大きく、とても目立ちました。非常に長い嘴(くちばし)を干潟にあるカニの巣穴に突き刺し、カニを食べていました。ホウロクシギは世界的に数が減っている鳥で、東京湾で観察できる機会もかなり減っています。その他、ミヤコドリ、オオソリハシシギ、メダイチドリ、ハマシギ、ミユビシギ、ソリハシシギ、ダイゼン、チュウシャクシギが観察できました。

以上 稲村優一(自然博物館)

3月13日は激しい雨が降り、市内で避難勧告や土砂災害警戒情報が出されました。季節の進みは早く、4月中旬ごろには5月上旬に咲く花が開花しました。

自然博物館のwebサイト（ホームページ）を 調べ学習や事前学習にご活用ください

自然博物館のwebサイト（ホームページ）では、つぎのような素材（コンテンツ）をご用意しています。

○ オリジナル動画

- ・グリーンスクールで訪れる大町公園の自然観察園（長田谷津）について、毎月の風景や動植物を動画で紹介しています。
- ・同じく長田谷津について、タヌキやノウサギ、オオタカなど、一般の観察では見られない動物の生態を、センサーカメラで記録した動画で紹介しています。
- ・展示や、学校への出張授業で用いた教育普及用動画が見られ、順次増やしていきます。

○ 自然観察週報

自然博物館の学芸員の観察記録です。1998年からのデータを1年ごとにエクセルのファイルで提供しています。すべて市川市内の情報なので、子どもたちのタブレットにダウンロードして調べたい生き物を種名で絞り込んだり、長田谷津や江戸川放水路など場所で絞り込んだりすることができます。たとえば野鳥の「カシラダカ」で絞り込むと、長田谷津では2011年を最後に記録がありません。その原因をテーマに調べ学習を発展させるのもおもしろいと思います。

○ 自然博物館だより

自然博物館が隔月で発行している読み物です。市川市内の自然の話題を取り上げているほか、分類学や生態学の立場で自然や生き物を解説した記事もあります。最新号および創刊号までのバックナンバーをPDF形式のファイルで提供しています（ダウンロードできます。古い号は準備中です）。自然博物館が発行したものですから、書かれている内容についてお問い合わせいただくことも可能です。記事について子どもたちとメールでやりとりできれば楽しそうです。

○ デジタル展示室

過去の企画展のパネルなどをご覧いただけます。今後、調べ学習に使いやすいように内容を更新していきます。

第34巻 第2号（通巻第194号）
令和3年6月1日 発行
編集・発行/市立市川自然博物館
（市川市教育委員会生涯学習部）
〒272-0801千葉県市川市大町284番地
☎047(339)0477